

# 「スペイン」「バスク」近代への歩み

## －ブローデルとウォーラーステインの理論と「実際」－

渡部 哲郎

はじめに

本稿は、最終講義予定のノートを原稿にしたものである。世間では、筆者が評価されている専門分野はスペイン現代史および「バスク問題」である<sup>(注1)</sup>。しかし、ここに至るまでの関心事は振り返ると、次のステップを考慮する上で重要であった。そこで自分なりの「研究小史」を辿りながら、論考を進めたい。

西洋史研究のスタートは学部時代のゼミで読んだ「17世紀危機」を扱った英文の論文集だった（後に邦訳された『十七世紀危機論争』創文社 1975 年刊。ホブズボームとトレヴァー＝ローパーの論争で有名）。その前の 16 世紀は後述するようにヨーロッパの「アメリカ到達（発見）」（「大航海時代」）の影響から経済成長が著しく人口も増加した。しかし 17 世紀に入ると農業部門では凶作・不況が進み、人口も停滞した。また各地で戦争・革命・反乱が勃発した。このような事象を背景にヨーロッパ近代「萌芽」の様を当代の代表する研究者たちが論じたのが、ゼミのテキストだった。「16 世紀」のブーム、それに続く「17 世紀」の混乱。その残像からか、後世、スペイ

ン研究を専門にするようになってからも、ヨーロッパ近代に向かう諸相に関する資料・文献を読む習慣がついた。スペイン留学（スペイン・バスク地方ビルバオ市にあるデウスト大学）の間に国内外の専門研究に詳しくなればなるほど、スペインを扱う外からの「（スペイン）位置付け」が気になったが、時間が経てもその位置付けは昔も今もあまり大きな変化がないことが疑問に思っている。スペイン研究が進化しているにもかかわらず、その成果が一部にとどまっているようだ。その起因についてヨーロッパ近代形成に重要な「16 世紀」理解に今回は注目する。その際に特にフェルナン・ブローデルとイマヌエル・ウォーラーステインの「理論」の影響を俎上に上げる。影響を与える二人の大家を代表する著作は初版からかなりの年代を経ているが、それでも今日重要であるのか「近代」形成の議論には、必ず引用される。多作であり、それぞれ引用される著作や論文も多いが、ここでは二人の特色に注目するためにつぎの 2 作のみを取り上げた。本論は二人の巨匠の論説を説明・批判するものではなく、二人があまりにも注目しなかった「歴史事実」を取り上げて論を進める。

## 1. 二人の「知の巨匠」の論説

本論ではブローデル『地中海』、ウォーラステイン『近代世界システム論』を中心に二人の「考え」を抽出して、次に筆者が専門とする「バスク」の資料を提供して比較検討する<sup>(注2)</sup>。二人の「知の巨匠」が語る「イベリア半島」「バスク」についてどのように取り上げているのか。その中にはイベリア半島の国々（スペインとポルトガル）、時には地方・地域が取り上げられているが、それらの「ヨーロッパ」「近代」形成への貢献と役割への言及に注目する。

ブローデルは大著『地中海』（原題は、「地中海、フェリペ2世時代の世界」）において、地中海地域を俯瞰し、歴史理解の基本を示している。「短波（個人）、中波（人口、国家、文化、経済）、長波（自然、環境、地理、地政）の三層構造で歴史を理解する」ことを説く。そのなかで、「ビスカヤ人、バスク人」の項目があり、交易に従事するバスク人が「近代」以前の「地中海」にも登場した事実を示している<sup>(注3)</sup>。しかし、後述する北西ヨーロッパとの交易については取り上げていない。

一方、ウォーラステインは「近代世界システム」論を唱え、ヨーロッパが「アメリカ貿易の独占」によって近代世界の「覇権」を掌握したことを説く。近代資本主義の発達のスタートにイベリア半島諸国（スペインとポルトガル）を取り上げる。近代以前の交易活動についても言及し、地中海から大西洋へ、世界市場へ変貌する様も述べている。近代資本主義の誕生以前の「準備期」に北ヨーロッパと南ヨーロッパ・地

中海の交易活動について詳述した。「覇権」国にならなかったスペイン衰退の一方、オランダとイギリスが「覇権」国にあることを説くが、イベリア半島内にあるポルトガル「経済」の継続・維持にこだわるように述べる。これは、彼の理論の根幹を成す「中軸」と「従属」（辺境）の枠を説明するのにポルトガルによる奴隷を使用した植民地砂糖プランテーション経営が必要であることを示す。スペインの衰退＝イベリア半島の衰退となれば、ポルトガルも同様に扱われても良いが、そうではない。ウォーラステインの論からはポルトガル経済は19世紀までもまだ衰退しない。ポルトガルは17世紀には植民地ブラジルにおいて砂糖プランテーション栽培を開始し、砂糖をヨーロッパ市場へ輸出したと言う。18世紀以降に経済的に拡大するイギリスの影響下にあったにしても、その前にはまだイベリア半島内の一国であり、後述するように同じ半島内の地域（例えば、バスクなど）との交易が続き結びついていた<sup>(注4)</sup>。

ウォーラステインの理論には「バスク（その主要港ビルバオ）」が登場しない。後述するが、ウォーラステインは理論が優先し、「歴史事実」を飛ばしていると見ることができまいか。彼の理論とそのベースになるブローデルの著作には半島沿岸部への配慮があったが、ウォーラステインは注目しなかった。ポルトガルの例示からも分かるようにイベリア半島内における半島沿岸のその他周辺地方の交易活動が継続・維持されていることが後述する史料から読み取ることができる。さらにポルトガルの植民地経営と交易が単独で維持されていた

と説くには、時間の経過が必要であった。後述するように半島内の小規模な商業活動が維持されていたことが大枠でのスペインとポルトガルを支えていたことが分かる。ならば、近代以前、産業革命以前の「先駆的な商業ルート」の存在とその消滅・継続を明らかにすることはそれなりの意義がある。

## 2. 「近代」以前から「16 世紀」へ

### 1) ヨーロッパ「海運」事情 ―「1492 年」以前

ヨーロッパの交易の中心は海運だった。ヨーロッパの港町の商人たちは海岸に沿って港、港をめぐって交易した。それぞれの港をトレースすると、ヨーロッパは「大陸」という通念があるが、ヨーロッパはユーラシア大陸の西端の「半島」に見えてくる。そう考えると、今日の西ヨーロッパがアルプスやピレネーのような高山の谷間に河川を通じて行われた陸路交易よりも港から内陸へ向かう通路が有力であったことが理解できる。

ヨーロッパ（北西ヨーロッパ）は 11 世紀以降十字軍の遠征によって経済圏、商業チャンスが広がった。海運においては 11 世紀地中海を中心にイタリア商人たちが活躍、組織化され、12 世紀にはその全域に活動の場を広げていた。14 世紀には地中海から北ヨーロッパへ、また北ヨーロッパから地中海へ物資の交流がみられた。南ヨーロッパや西地中海からイスラム勢力が駆逐され、ジブラル海峡の航行が開放されたことが大きかった。イタリア産とフラン

ドル産の毛織物とアジアから地中海に届いた香辛料が行き交っていた。地中海にはイタリアやバルセロナなどその沿岸の商人だけでなく、北西ヨーロッパのフランス、フランドル、イングランドの商人も入ってきた。

なかでも珍しい物資を運ぶ遠距離交易は高値の取引になる。遠距離に荷を運び、また近距離でも複雑に入り組んだ小さな港に出入りする船舶とその技の持ち主となると、限られてくる。なかでも「バスク」の造船・操船の技は一目おかれていた。「バスク」の存在感が増す。

15 世紀ジェノバの古文書にブルターニュの小型帆船が登場する。年代記「フィレンチェ史」には 1300 年前後に大西洋から船舶来航の記述がある。1304 年ガスコーニュのバイヨンヌ出身者が「コカ」に乗ってきた、とある。「コカ」とよばれた一本マスト、四辺形の帆がある小型帆船は少人数の乗員で経済的な船として利用されバルト海からビスケー湾で活躍していた。小型帆船の地中海へのデビューは造船技術の交流を物語るものだ。ガスコーニュとはバスクのフランス語読み、バイヨンヌはフランス・バスクの町である。ビスケー湾（ビスカヤの湾＝バスクの海）でバスク人の船乗りたちが発明したバイヨンヌ舵（バスク舵）と呼ばれた、側舵に変わる船尾中央に装備した舵は、この小型船舶に安定性を増し、狭路の運行を便利にしたので、一斉に風靡した<sup>(注5)</sup>。

ミッシェル・モラは著書『ヨーロッパと海』の中で、「親切な海上輸送人―バスク人とブルターニュ人」の項を立てて叙述する。14 世紀以降、両者は相当数の小型船

船を保有していた。安定した海上輸送は評判を得ていた。乗組員は訓練され狭い水路や航路の目印を完璧に熟知していた。14世紀、カスティーリャ産羊毛がフランドルへ運ばれ、ビスカヤ産の鉄が地中海のバレンシアとバルセロナへ、バスクの船舶の積荷になった。それらの運搬の帰りに船で地中海の物品を北方へ運ぶ。ローマ近郊産出の明礬（ミョウバン）の取引にはフランスのルーアンに運送されるのにバスクの船舶が使用された。海上交易に活躍したバスクとブルターニュについてモラはこのように記述している。

バスク側の史料から見ると、次のようになる。1492年以前、15世紀初めバスクの町ビルバオでは町中から川を12キロ下ったところにある河口までに200隻の帆船が常駐し、周辺の村には8千から1万の船乗りが待機していた、と証言がある。バスク地方の一つの港町がこのような様子であった。この1492年レコンキスタを完了するカトリック両王の年代記に「ビスカヤ伯領、ギブスコアに住む人々は航海術に熟知し、他の人よりも抜きん出ている」とある。1492年以降、大西洋の向こうへ、つまりアメリカ大陸からアジアまで乗り込んで行った人々の中に海へ帰巣本能を持つといわれ、子供の時から海で鍛えられたバスクの民がすでにいたのである<sup>(注6)</sup>。

バスクに隣接する「親切的な海上運送人」の一方、ブルターニュ人は英仏海峡へ向かい、ガスコーニュ湾（スペイン語側から表記するビスケー湾とほとんど重なる）を航行する船舶と接する有利な位置にあった。難破や漂流を回避する安全な運搬に地元の

小型帆船が投入された。経費も軽便で安全となると、ブルターニュの船は地中海へも乗り出していった。前述したように15世紀ジェノバの古文書にもブルターニュの船が登場した。その逆、ジェノバの商人が北ヨーロッパへ向かった。ここに至る「10世紀から13世紀・・・ひとつの海洋世界が存在」した、と言わしめる状況があった。その輪の中にバスクの人々もいたのである。このようなヨーロッパ海運における「独自な」活躍と言っても、その量的な豊かさを見過ごすことになる。

ヨーロッパ商業の成熟にはイベリア半島の事情も加味された。海上輸送におけるバスク人、カタルーニャ人が早くから登場したが、1492年レコンキスタの完了つまりイベリア半島がキリスト教徒の支配する領土となり、そこに成立した国家権力はユダヤ人を追放するようになった。改宗したユダヤ人（マラーノ、コンベルソス）もイベリア半島の商業圏とつながりがあったところに離散することになる。ポルトガルへ、フランドルへ、今日的な意味で国際的なつながりが広がったことになるが、そのつながりは従来からの商業による利害関係、そのなかで生まれた血縁関係が根底にあった。カトリック王国カスティーリャの商業の中心ブルゴスから、そのヨーロッパ領土へつながる港町ビルバオから逃れてアントウェルペンなどフランドルの町へ、そしてピレネーを越えてフランス側バスクになるバイヨンヌへ、ユダヤ人改宗ユダヤ人たちは逃れていった。これらのルートは皮肉にもイベリアの商業圏の販路にあたった<sup>(注7)</sup>。



## 2) 「バスク」商人とそのネットワーク

イベリア半島の付け根ピレネー山脈の大西洋側に面した「バスク」の人々は古来陸地や港を渡って北にあるフランドルやイングランド、イベリア半島南端から地中海へ入り込んで交易をしていた。大西洋沿岸地帯にあったバスクの港はカスティーリャ王が付与した「地方特権（フエロス）」の一つとして免税されていた。そのために内外から物資が集まるようになったが、その交易の痕跡が各地に残っている。その跡をモザイク画に石片をはめるような作業をすると、1492年以前の「バスク」のネットワークが見えて来る。

1492年以前にバスク商人の交易活動はビスケー湾沿岸を北上すると、フランドル地方のブルハ（ブルージュ）、アンベレス（アントウェルペン）、その途中のフランスのナント、ラロシェルに及んだ。1281年までにはラロシェルやブルハには常設の交易所（市場）があり、15世紀初めバスク商人（ビスカイノ、ビスカヤ地方の人の意味）とナントの商人同士が協定を結んだ記録が残っている。ラロシュやブルハでは、同地域の出身者で同郷民団（ナシオン、つまりネーションの集まり組織（「ビスカヤのナシオン」、「エスパーニャ沿岸のナシオン」の名前があった）を形成している。1348年ブルハにおいてバスク人商人は「参事会代表の家」をもち、それを「マレミンメ（マーメイド海の妖精）」と呼び、常設の交流の場所とした。その場所は現在でも「ビスカヤ広場 Biskayers Plaatz」の名前でブルハ市街図に残っている<sup>（注8）</sup>。

とりわけフランドル地方における商業覇

権をめぐってビルバオはブルゴスと争った。その中心都市ブルハ（ブルージュ）にブルゴスが中心になり、トレドやセビーリャの商人と集ってカスティーリャの館が設立され、1443年から領事館らしきものとなった（法的な認知は1494年）。これを追っかけてビルバオも1489年に同館を設立した。カスティーリャの荷（主に羊毛）がフランドルに運ばれた。ブルゴスはサンタンデル港を使用、ビルバオは自らのビルバオの港から出荷する。両者の荷もバスクの船が荷受していたのだが。フランドルのブルゴ・ニュ大公フィリップ良公が1465年に双方の調停に乗り出し、両者の領事館機能を維持することにした。

バスクはヨーロッパにおける羊毛市場と鉄市場をコントロールしていた。その積み出しは、バスクとカンタブリアの北部から行われた。1580年初めまでにバスクの港が優越するようになったのは、羊毛輸出に関する勅令（1561～1628年）があったからだ。さらにバスクの港が優遇されたのは税制による。ビスカヤ海岸部は勅令によって免税地域であり、内陸のカスティーリャに入る際に課税された。バスクの鉄とカスティーリャの羊毛は地中海よりも北西ヨーロッパ、ブルターニュとネーデルランドへ運ばれた。特にビルバオはブルターニュの港ナントと繋がりがあった。13世紀ブルゴスとビルバオの商人はブルターニュの沿岸へ商業圏を求めた。英仏百年戦争（1337～1453年）に際して、カスティーリャ王国はフランス・ブルターニュを支援に回り、商業特権を入手した。1430年協定によってカスティーリャ羊毛とバスク鉄がビ

ルバオから荷出され、ナントを經由してブルターニュの布・穀物との交易が通行料を値下げて行われていた。1511年ビルバオはナントに在外公館・領事館、1530年交易裁判所を設立した。

ネーデルランドにおいては、13世紀初めブルハにバスクの船舶が到着していた。百年戦争にはイギリスの介入があったが、その終結後、1455年からブルハにはビスカヤ「同胞団」(nación de Vizcaya)が登場、羊毛独占をめぐるブルゴス商人と争った。この町には前述したようにビルバオとブルゴス双方の領事館設立が認可されていた。バスク人は町に礼拝堂を建設、そこに集まって交易活動の相談をした。

本拠であるビルバオには、ブルゴス領事館(1494年設立)に続いて1511年にビルバオ領事館が認可されていた<sup>(注9)</sup>。

鉄については、19世紀までヨーロッパで最も豊かな鉄鉱脈がビスカヤ地方にあり、その中心都市がビルバオだった。古くは15～16世紀に年間1万5000トン産出、全ヨーロッパでは4万～10万トン産出であるから、15～37.5%はバスクの鉄であった。16世紀初めビスカヤで80の鍛冶場、ギブスコアにも同数に近い鍛冶場があったという。17世紀初めビスカヤ2万7600トン、ギブスコア1万2020トンを産出した。以上の数字が残っているが、その取引については詳細な記録がない。鉄の取引ルートはブローデルによれば、「一時的なものではなく、近場の供給先があり、フランス、イギリス、フランドルの外国商人がやって来て」、15世紀後半からはイベリア半島内へも広がった<sup>(注10)</sup>。

独自の商業圏がヨーロッパ商業の成熟によって拡大する。外因としては地理的拡大、内因では宗教対立、ユダヤ人の離散があった。16世紀以降になると、宗教対立・戦争も商業の発展に役立って行く。

### 3) ヨーロッパ内の成長から拡大へ

12世紀中頃から14世紀初め、商業と農業は中世期の中でも最も繁栄し、これによってヨーロッパは大変容する。その中で生まれてきた組織体が「国民国家」と呼ばれるものの端緒である。しかし、帝国ではなかった。16世紀スペインに見られた帝国化は失敗する。中核となる国家機構が強化され、国民国家が台頭する。ブローデルは、15・16世紀に経済が発展したことが広大な国家・超広大な国家に有利となった、と言う。香料や宝石(奢侈品)を求めて交易するアジア・東洋への進出には、金銀の「地金」が必要であった。また14・15世紀西ヨーロッパは食糧と燃料(北方の森林地帯)を必要とし、15・16世紀には小麦など新しい生産地との交易に地中海平野部へ向かう。土地に縛られた中世封建制崩壊の危機には、分業体制を進めて地理的に拡大する以外に解決方法がなかった。まさにウォーラステインが言うようにヨーロッパ世界経済の成立を促す大航海時代の到来が待たれたことになる。

ヨーロッパ世界経済の成立、裏を返せば、中世の封建制の危機には分業体制を地理的に拡大する以外に解決策がなかったのである。その結果、外へ向けて拡大する「長期の16世紀」と言われる1450年代から1550年代には人口増加、物価騰貴が見

られた<sup>(注11)</sup>。

その分岐となる「16世紀とは何だったのか」。ウォーラーステインの言説によれば、次のようになる。この世紀にヨーロッパが新世界に進出した。その対外進出がもたらした決定的な意味は、ブローデルが看破した「新世界の金・銀がヨーロッパをして、その本来の資力を越えた生活をし、その貯蓄を上回る投資をすることを可能にした」点にあった。

次に価格革命と賃金上昇の「遅れ」を利用して貯蓄以上の投資がなされたこと、また貯蓄そのものが増加したことが第二の特徴である。地金そのものが一種の「商品」であった。通貨変動からみせかけだけでなく、16世紀の「繁栄」は実在し、その基礎は商業の全般的な発展にあった。

そして第三に農村労働の形態が変化する。周辺については「換金作物栽培のための強制労働制」が始まり、中核地域においてはヨーマン＝農業企業家が勃興し、ともに資本主義成立のために不可欠な要素となった。16世紀に「資本主義時代」が幕開けし、その資本主義が「世界経済」の形態をとった。

最後にウォーラーステインに従えば、ヨーロッパを中心とする世界システムの覇者が登場することになる。彼が提示する16世紀「ヨーロッパ世界経済」では、西欧諸国が中核、かつての最も進んだ地域である地中海地方が半辺境、東欧と新世界（アメリカ）は辺境とする。この考えを決定付ける意味からも、ヨーロッパの新世界への進出こそは「ヨーロッパ世界経済」成立の鍵となる「事件」であった<sup>(注12)</sup>。

ウォーラーステインが主張する「近代世界システム」は15世紀末から16世紀初めにおける「ヨーロッパ世界経済」の出現によって形成される。まさに「近代への序曲」である。

### 3. 「大西洋」交易とビルバオ

#### 1) ビルバオとその商人たち ― 16世紀

1492年アメリカ到達（発見）以後、スペイン・ヨーロッパ経済の変貌についてはすでに多くが述べられている。ウォーラーステイン理論においてもこの変貌が引用されている。セビーリャ（港）が新大陸交易を独占、その「富」がそのままヨーロッパへもたらされたことによる資本主義の発達モデルが提示されてきた。この理論によれば、中心の周辺は「搾取」の対象となっている。

フランス人研究者ジャン・ピエール・プリオティはこれに反論する。彼は16～17世紀（1520－1620年）ビルバオ市・港の経済・社会を分析し、ビルバオがバスク沿岸の港以上の役割を明らかにしてバスク全体がカスティーリャ王国の政治・経済に重要な度合いを持つことを説明した。その中で1560－70年にはビルバオの交易はセビーリャのそれに匹敵していたことを示し、反論の一つとした。ビルバオとフランスとの交易量から分析し、1560年代ビルバオには鉄の交易を入れなくてもセビーリャに匹敵する交易量があった。バスクはイベリア半島一地方の射程ではない、ヨーロッパ経済の中で切り離せない役割を持っていたと言う。その内容は、巻末にある図

表(7)において示したように16世紀全般、西ヨーロッパ各国から商品が持ち込まれていることから分かる。

ビルバオを中心にしたバスク沿岸、カンタブリア海沿岸の港にはそれ以前からの交易活動があった。中世末から近世にかけてヨーロッパの沿岸交易にはバスク人、バスクの港、バスクの船舶が登場する。

プリオティは著書『ビルバオと16世紀ヨーロッパ商業』の中で鉄、木材、造船、漁業について具体的な分析をして、ビスカヤ経済がカスティーリャ王国の特権と結び付き、発展する過程を明らかにした。ビルバオの港・町と商人たちは「黄金世紀のスペイン政治・経済に食い込み、スペイン帝国を推進する重要な支点の一つになった」と論じた。それゆえにセビーリャがスペインを代表する港として唯一の中心と扱うことの誤りを指摘した。アメリカ「発見」がスペイン経済を根本的に変えたという考えに疑念を生み、その「実際」が1560年代にはまだないことを示した<sup>(注13)</sup>。

## 2) 16世紀「バスク」の活動

16世紀「黄金世紀」におけるバスクの交易活動についてあまり注目されて来なかった。カスティーリャ王国の積み出し港としてバスクの中心的港ビルバオの存在は確認されてきた。しかし、ビルバオ初めとしたバスクの港における「交易」には多くの研究があるわけでもない。カルロス1世(カール5世)、続くフェリペ2世の同時代の人々がアメリカ貿易において「金と銀に専念する」ようにふるまうと、後世の歴史家たちもそれが事実であるかのように受け

取ってきた。この世紀にスペインの交易活動はまだ北西ヨーロッパとの関わりが多く、その中においてバスクを欠かすことは出来なかったのである。その実態は、巻末の図表にあるようにビルバオを中心とした「多様な」活動からも見ることができる。

当時のスペイン王国の人口は700万人、アメリカ植民地に10から20万の白人(イベリア半島出身者を含むヨーロッパ人)、アメリカ原住民何千万、黒人奴隷20万人のデータからして、ヨーロッパ各地からビルバオにもたらせるヨーロッパ製品の消費地は、スペイン王国の中心カスティーリャであったことが分かる<sup>(注14)</sup>。ビルバオ入港リストから見ると、フランス、フランドル、ドイツ、ボヘミア、ポルトガル、ミラノ、レバント発の商品、さらにアフリカ、インド、アメリカのポルトガル植民地発の商品、ニューファンドランド(テラノバ)からの鯨油とタラがある。

ビルバオを拠点にした商人(バルトロメ家 Bartolome)の史料・記録によると、以前からカンタブリア、ブルゴス、アイルランド、ポルトガルから買い手、イギリス、フランスから売り手が来ていた。その史料から1568年具体的にリンネン製品を見ると、トレド、メディナ、パンプローナ、その他のナバラ、サラゴースの人々が買いに来た。700から800の布袋が一個も残らなかった。このような記録からもビルバオがカスティーリャと外国との中継地ではなく、国際的な市場(フランス、イギリス、ネーデルランド、バルト海からの産品)であったことが分かる<sup>(注15)</sup>。

16世紀半ばからブルゴスの衰退が明ら



かになって来る。1561年マドリードが正式な首都になったにもかかわらず、旧カスティーリャ市場は弱体化していた。この陸上交易弱体化の一方、沿岸交易は盛んだった。ガリシア、ポルトガル、アンダルシアへの積み荷（鉄）の帰り、それぞれの地方物産がもたらされた。ビルバオは市場・消費地であり、半島を回る海運、カスティーリャ地方の陸運の集結点でもあった。

ビルバオではイベリア半島をめぐる海運、カスティーリャへの陸運、そして地元バスクにおける消費、三つの役割が機能していた。その他、バスクの港はビスカヤ地方、ギブスコア地方にもあり、その一つサンセバスティアン港の資料（1563年）には、ビルバオには劣るが、漁場基地であり、タラの商品化をした記述がある。さらにフランスや北西ヨーロッパから鉛、皮革の原料品、織物の加工品が届き、ボルドーや隣接するフランス・バスクの港から船舶のコーティング油タールが届いた。ギブスコアの港は隣りのビスカヤの港（代表がビルバオ）よりもまだ内向きの港だった。同じ時期にビルバオの港におけるナントとの取引高はギブスコアの港のそれよりも少なくとも10倍あった<sup>（注16）</sup>。

前述したようにバスクはヨーロッパにおける羊毛市場、ヨーロッパ・アメリカの鉄市場をコントロールしていた。時代が進んで16～17世紀においてもヨーロッパ経済におけるスペイン産羊毛の重要性は他言を待たない。その積み出しは、バスクとカンタブリアの北部の他に、アリカンテ・カルタヘナ・ムルシアの南東部、セビーリャの南西部から行われていた。1580年初めま

でバスクの港が優越するようになったのは、羊毛輸出に関する勅令（1561～1628年）があったからだ。しかし、その貿易は一港による独占ではない。1561年～70年カンタブリアの港（サントンデールやラレドの港）が積み出しの50%を越えていたが、その後横ばい40%まで下がった。1570年初めサントンデールの役割が下がり、ビスカヤ地方ビルバオを中心に隣接するギブスコア地方に入るデバの港が優位になり、1574～1582年にギブスコア地方の港がビルバオを抜いていた。1575年からサンセバスティアンも加わっていた。それぞれバスクの船舶が用いられ、カンタブリアはブルゴス商人、ビルバオはビルバオが中心だが、ブルゴス商人も介在していた<sup>（注17）</sup>。この混乱が多面的な「ビルバオ」を物語ることになる。

ビルバオが交易活動を展開する北西ヨーロッパの動向、その変化を見ると、15世紀後半にアンベルス（アントウェルペン）がブルハ（ブルージュ）に代わり繁栄した。その15世紀後半、カール無頼王の死後に内乱、スペイン人商人が大量に町を脱出した。1477年ブルハスの町は3日猶予によって町に帰還したものには以前と同じ権利を保障もしたが、アンベルスの優位はゆるがなかった。16世紀初めアンベルスの資料には、74名のスペイン人商人はほとんどブルゴスカビスカヤ出身者。16世紀半ば、約30数名のバスク商人がアンベルスとスペインの交易に従事していた。ブルハスでは特権を保持していた港には、1548年年間10～20隻の大型船が入港し、うち1～2隻の羊毛船がビルバオ・ラレドから出港

していた。1553年5月1日から1554年4月30日の記録によると、スペイン羊毛はビスカヤとカスティーリャのもの、9272荷（カスティーリャ）、6759荷（ビスカヤ、約40%）が荷揚げされた。1556年には1267袋のうち、全体の3分の1にあたる420袋がビスカヤ人（領事館メンバーとその親族）が扱っている<sup>（注18）</sup>。

1570年スペイン－ネーデルランド間の交易をする税関記録によれば、40隻がスペイン北部から羊毛と鉄、53隻が南部から塩と果物と羊毛を運んでいる。アメリカ発見後にも、北部はまだ南部の港の競争相手であることが分かる。しかし、鉄の交易については、詳細があまりない。1486年～1487年、1860トン弱がフランドルに運ばれ、16世紀半ば、ビトリアとビルバオの商人がフランドルで鉄を扱っていた。またブルゴスの商人（フアン・デ・コバルビアス Juan de Covarrubias）も介在して鉄取引に保険証書を付けていた<sup>（注19）</sup>。

### 3) ビルバオ 商業・消費センターとしての発展

ビルバオは単なる物資の「中継基地」ではなく、販売・消費センターの役割を担っていた。ビルバオの港から後背地カスティーリャ地方の消費地に物資が送られた。その中には贅沢品のみならず、日用品もある。1565－1575年フランス製レース地の流通記録がある<sup>（注20）</sup>。シモン・ルイス（Simón Ruíz）はビルバオでバルトロメ・デル・バルコ（Bartolomé del Barco）が荷受けした物資を自らの勘定でカスティーリャへ送る役であった。この勘定記録に「分

配」の実例が見られる。1565、1566、1567年の最初3年間、カスティーリャへ向かう発送量は、ビルバオ受け取り量の13.2%、21.2%、51.3%、次の3年間（1568、1569、1570年）には在庫量に対して出荷量・数が上回っていた。1568年、港にあった255の荷に対して451の荷が発送された。同じく、1569年549の荷に対して554の荷、1570年346の荷に476の荷が発送された（表－参照）。消費地への発送が港到着量を越えている。この不一致はどう説明できるか。ビルバオに注文があった時点で、輸送料や天候不順による安定供給を考慮して「調整」が行われたことが判明する。この時期6年平均すると、53%が発送され、47%が保管されていた。ストックされた荷はその他ローカル市場へも回った。次の5年では、72.3%発送、ストック27.7%。1555年スペイン王国全体のフランス布の流通を見ると、ビルバオで入荷・販売したのが約14%、セビーリャが1.4%であった。1560年初めは、ビルバオの記録は15～20%。フランス・スペイン関係において、ビルバオが占める重要度がしめされた数字である。

シモン・ルイスの計算によれば、ビルバオ－カスティーリャ内陸（ブルゴス、メディナ・デル・カンポ、バリャドリッド、メディナ・デ・リオセコ）ルートが圧倒的に多く、その他サラゴサ、バレンシアへも送られた。その収益率も分かっている。

フランス産布地の収益率は16世紀末、ビルバオで9～12%、アンダルシア（セビーリャなど）で13.32～17.09%、内陸のカスティーリャ市場のサラマンカで18.31

表 ビルバオ港における「フランス製レース地」荷受け・発送の数

年	荷の発送	受け荷	発送率
1565	143	1080	13.2%
1566	284	1338	21.2%
1567	97	189	51.3%
1568	451	255	176.8%
1569	554	549	100.9%
1570	476	346	137.5%
計	2005	3757	53.3%

(Priotte, ③ ,p.134 より作成)

～47.54%であった。イギリス、ノルマンディー、バスクなど海岸沿いの交易は安全でリスクが少ないので、販売価格に反映した。1570年アメリカ・メキシコでは原価に200%の利益を乗せていた。その数字は交易の安全・リスクを反映していた<sup>(注21)</sup>。

#### 4. ビルバオと「近代」

ビルバオとその人々が17世紀以降の「近代世界」作りに参画したか、どうかについて考えてみたい。前述したように1492年「以前」と「以後」もビルバオを基点とする交易活動は継続していた。ヨーロッパ経済が「世界支配」の端緒局面であった時期に、16世紀60～70年代まではビルバオの港を介してバスク経済は大いに成長し、カスティーリャ王国に貢献した。17世紀初めには、王国のアメリカ金・銀の受け入れ先であるセビーリャが中心となる。その30年代に、カスティーリャ地方内部の交易網が「メディナ・デル・カンポ」－「ブルゴス」－「ビルバオ」から「ブルゴス」－「メディナ・デル・カンポ」－「セビーリャ」に軸が移るようになると、セビーリャにバスク人コミュニティが設立された。こ

れについては後述するが、バスク人の交易網がそのまま移動したかということそうではない。バスクの商業ネットワークはあくまでもビルバオを中心にしていた。巻末の図表からも取引品目や取引国のデータをみても16世紀後半になっても商業の中心はバスクであり、ビルバオだった。大西洋貿易は危険と負担を伴っていた。ビルバオは鉄、造船、カスティーリャの羊毛、魚商品、ルーアンやナントのラシャ、レースの生地、紙、小麦、ボルドーの染料、ブドウ酒を扱っていた。まだ市場がヨーロッパとイベリア半島内にあったことを示している。

当時のビルバオはいろいろな業種（造船、鉄鋼、商業、漁業、運輸）が交差する経済を支配していた。商業は戦いと同じだった。王室に出入りするビスカヤ人は戦闘に必要な船舶や武器を調達した。16世紀から17世紀にかけてビルバオはバスク沿岸の港以上、バスク全体どころかカスティーリャ王国の政治・経済において役割を担っていたことが分かる。ウォーラーステインの理論にはカスティーリャ王国が推進した新大陸交易はセビーリャが独占し、その後の資本主義発達の軌道が示されている。

しかし、スペイン・バスク地方は中世末

からスペイン・バスク地方はヨーロッパ経済の中で切り離せない役割を果たしていた。1400 年ころ、バスク海運はヨーロッパの変化に積極的に参加していた。地中海、大西洋、北海へ向かい、バスクの鉄、カスティーリャの羊毛がビルバオ港からネーデルランド、フランス、イギリス、イタリア・トスカーナへ出荷されていた。その帰り荷にバスク（ビルバオ商人）とカスティーリャ（ブルゴス商人）は小麦、リネン、ラシャ、パステル（青色塗料）を運んだ。中世末 15 世紀末（1492 年）からセビーリャ港が登場したが、その交易路はカナリア諸島、ポルトガル、地中海へ進んでいた。巻末図表 2 にあるように 16 世紀初めビルバオ商人が南スペインのアンダルシアやカナリア諸島へ資金の貸し出しをしていることに注目したい。

16 世紀ビルバオの人々は商業網（ネットワーク）とその活用能力に長けていた。その際にブルゴスの商人たちと協力する。商人たちはヨーロッパ中産階級に匹敵する社会層を形成し、ビルバオの人々に結び付き、カスティーリャ経済の基盤を左右する役割を担っていた。それゆえに、ビルバオの軽重も計られる。多業種、多様な活動、その情報はビルバオを介してカスティーリャ全体へ伝わった。16 世紀最後の 10 年間、ヨーロッパ北西部における戦争が原因で経済活動は著しく妨げられた。この時期、北西ヨーロッパは紛争続きであり、紛争がビルバオ市場に打撃を与えていた。その危機克服から、カスティーリャ（ブルゴス商人）と繋がるバスク商人たちは、イベリア半島と新世界との交易に物資と資金投資

に転じるようになった。ポルトガル、カスティーリャ、アンダルシア、アメリカ方面へ活路を求めたのである。港の分散、商業網の解体からビルバオなどのバスク人は金融投資を目指すもの、王室（国家）に従い軍艦の造船や武器製造に転進する事業家たちが登場した。17 世紀、独自のバスク人商業網は小規模化し、扱う商品が戦争需要品に代って行く。すると、その大勢は、王やこれに従う商人を含めた財政家たちが主流になる。

しかし、16 世紀から 17 世紀へ向けて、世界経済は西ヨーロッパ（オランダ、イギリス）中心に商業覇権が確立され、近代資本主義の形式となって行く。ビルバオの港を中心にして商業ダイナミズムは西ヨーロッパ商品に基づいていたが、扱う商品に変化が出て来る。スペイン産から植民地産への変化、アメリカ銀のバスクへの移送もあった。アメリカにおける鉱山開発に参加するバスク人がその利益を増進し、海外冒険に投資、貸付、海上保険など金融関係への関心が目立つようになる。ビルバオ以上に、サンセバスティアンなどギプスコア地方が交易活動に参加するようになると、この関心が高まった。セビーリャ中心に「大転換」はなく、従来のシステムが維持しながら徐々に内容が変化したのである。ビルバオを中心とした「貸し手」と「借主」の変化を見ると、主役は両者とも「バスク人」であることが明白である（巻末図表 1、2 参照）。



## 5. バスク商業網（ネットワーク）

### 1) 商人「移住」の意味

16から17世紀のバスク商人たちの「移民・移住」動向を見ると、単なる新しい「労働」「富」を得るだけではなく、自らのステップアップ（地位・権力の向上）を目指していることが分かる。バスク特有な「家族」の絆、血縁・地縁を重要視したネットワークが形成されている。レコンキスタ、海外植民による「カスティーリャ王国」の膨張に寄与する役割を担う。どちらかと言えば移民は自然発生的だが、バスクの場合は「組織性」がある。国際的な交易地やその消費地を結ぶところにバスク同胞（nación）組織や「領事館」「通商院」がある。船乗りの移民ではなく、商人の移民は経済の流れに沿っている。それもバスク的な組織は血縁・地縁を含む家族ネットワークであった。ヨーロッパに広がったネットワークには「物流・情報」が行き交うところに拠点があった。

そもそもバスクの港に外国商人たちが出入りするようになった経緯から見ると、漁港を中心に「魚」の取引は古くからあったが、同様に需要の源となったのは「鉄」産出地に近いところに港があったことによる。16世紀初め、ヨーロッパ全体の鉄の15～37.5%がこの地で産出された<sup>(注22)</sup>。造船（艦装）、武器製造に使用する鉄を積み出す港町、ビルバオに外国から商人たちが集まった。漁業（鯨、鱈の漁獲）に加えて、後背地となるカスティーリャの食糧や生活物資を輸入する港がビルバオだった。カスティーリャ・ブルゴス商人たちはビルバオ

を介してヨーロッパの物流を担っていた。

13世紀、レコンキスタはイベリア半島をさらに南下し、16世紀にはその中心的な港としてセビーリャに商人たちが集った。ここには地中海方面の商人たち、なかでもジェノヴァ商人が登場していた。そこにバスク商人も加わっていた。16世紀セビーリャにおける通商、法の門番となった「領事館（コンスラード）」の要職にバスク人が就任していた。さらにその職が同じ一族で継承されている。カスティーリャ王の任命によるバスク人脈の継承はバスク人の「重要度」の証明であった。

ビルバオ領事館（コンスラード）の役職を務めていたロペス・デ・レカルド（López de Recaldo 1530-40年）一家の中からフアン・ロペス・デ・レカルド（Juan López de Recaldo）が1510年からセビーリャ通商院の役職に就任した。その後任はバスク人ドミンゴ・デ・オチャンディアノ（Domingo de Ochandiano）、その後任もバスク人ディエゴ・デ・サラテ（Diego de Zárate）だった<sup>(注23)</sup>。

さらにカトリック王国となったカスティーリャ領域からユダヤ人が追放され、ヨーロッパ各地に逃れた。これによってカスティーリャ商業・経済が壊滅するように解釈されるが、バスク商人の活動から見ると、自らのカスティーリャ商業における役割が増し、むしろ商業圏拡大に役立ったと考えることができる。16世紀初めから17世紀初めのバスク商業圏は以下の広がりを持っていた。

（バスクが基点・中継となった商業網）<sup>(注24)</sup>

バスクー地中海  
 リヨン — ナント — バスク — カ  
 スティーリャ  
 フランドル — バスク / フランドル —  
 アンダルシア  
 ボルドー — ロンドン / ボルドー —  
 バスク — ロンドン  
 バスク — カスティーリャ — バスク  
 バスク — アストゥリアス・ガリシア  
 — ポルトガル  
 バスク — セビーリャ・アメリカ / バス  
 ク — アンダルシア  
 アメリカ植民地の内地網  
 バスク — ニューファンドランド —  
 ヨーロッパ

## 2) 情報のコントロールと権力への接近

1570 から 1580 年にイベリア半島をめぐる海運の少なくとも 80% はバスク・カンタブリアの沿岸に繋がり、バスクの海運業者の手中にあった、と言う<sup>(注25)</sup>。そのために各種のサービス提供も伴う。物の輸送は情報のコントロール（出発、到着地の情報を含む）が肝要である。海上交易は「情報」保持・伝達に有利だった。安全の確保だけでなく、保険・為替の授受（金融・貸付）もスムーズに運用できる。手数料を得る仕事であったが、安全・確実な運航はさらなる役割を持った。

海上交易を掌る機関は無駄のない、優位な交易を保証し、その成果から連帯が強まる。次の機関はバスク人がヨーロッパとアメリカで組織したものである。

バレンシア・バスク人領事館（Consulado vasco en Valencia）

ブルハ（ブルージュ）ビスカヤ領事館（Consulado de Vizcaya en Brujas）

ビルバオ・ナント通商院（Contratación de Bilbao con Nantes）

カディス・ビスカヤ航海士学校（Colegio de Pilotes vizcaínos en Cádiz）

セビーリャ・バスク協会（Congregación vasca en Sevilla）

メキシコ・アランサス・マリア会（Cofradía de Uuestra Señora de Aránzazu en México）

など

また、各地に同郷団（naciones）が結成されていた<sup>(注26)</sup>。

次に権力（王権）との繋がり、カスティーリャ王国「国家事業」にあった。前述したが、カスティーリャ王国はその際にバスク人による資金・軍艦の調達に頼っていた。王はセビーリャやカスティーリャの銀行家ではなく、契約・請負によってバスク人の前貸しをあてにした。他に鉱山関係にもバスク人は投資し、ポトシ鉱山も入手していた。商業や海運だけでなく、王国の情報を入手して「金融」（資金の貸し付け）から王権に繋がった。商人の人脈が権力の取り巻きになっていたと言えよう<sup>(注27)</sup>。

ビスカヤ人、ギプスコア人はカスティーリャ王が付与する特権（フエロス）によって一律に「貴族」扱いを受けていた。いわゆる「（集団・共有）貴族 la nobleza colectiva」が有効に働き、行政機構へ接近できた。また「血の純潔 la sangre limpia」は 16 世紀初め新キリスト教徒追放・排除によって彼らを社会的な優位に立たせた。貴族（la hidalguía）の特権である、免税特権

はビスカヤとギブスコア生まれの「全員」に伝わり、世代から世代へ受け継がれる。これは、経済的社会的な成功を導き、共同体への帰属意識を高めることになった<sup>(注28)</sup>。

イベリア半島における繋がりは「アメリカ」で大いに発揮された。アメリカにおいてバスク人脈は同族結婚によってさらに強まった。鉱山の運営、造船のみならず、セビーリャ、ネーデルランド、アメリカにおいて銀行家たちを動かして王に金を貸す。金融システムを通じて16-17世紀にネーデルランド、イタリアの戦場に資金を送る。商業・海運によるだけでなく、王室・政府の情報が自分たちの手、口で伝わる。アンダルシアからアメリカ、アントウェルペンからビルバオへ、ナポリからセビーリャへ情報が伝達される。その情報は商業にも生かされた。安く入手して高く売る、身内には安く、他人には高く。有利な商業活動ができた<sup>(注29)</sup>。

その権力網が凝集して行く。その際に「バスク家族とコミュニティ」が核心にある。バスク人はスペインの中で少数派である。「ビスカヤ人であること」(el mero hecho de ser vizcaíno)が次々に代わって生まれてくる。故郷がどうのではなく、「ビスカヤ人であること」が主、それゆえにポストが繋がる。次のような例え話が伝えられている。

ビスカヤ語を話すけれどもカンタブリア人は気さくで実直、ヨーロッパ第一級の船乗りだった。名声がある。アメリカにも多数の移民がいる。…(しかし、)  
ビスカヤ人は故郷でなくても、いつでも同

国人に出会う。「ビスカヤ人である、単なるその事実であること」でもって、推薦して繋がる…ビスカヤ領主国、ギブスコア、アラバ領主国、ナバラ王国は同盟を結び、スペインに連合する地方(県プロビンシア)であると、呼ばれる<sup>(注30)</sup>。

商業の世界では言葉少なく確実な運用をし、お金は同じ手の中に残す。保険についてブルゴスでの保険申し込みについてバスク人の仲介なしには行わない。セビーリャにおける交易でも同様なことがあった。それゆえに、外からは「不明な」部分がバスクにはあった。

## 6. 歴史事実と理論

フランス人研究者ジャン・ピエール・ブリオティは前述したように、16～17世紀(1520－1620年)ビルバオがバスク沿岸の港以上の役割を示しバスク全体がカステーリャ王国の政治・経済に重要な度合いを持つことを明らかにした。ビルバオの交易がセビーリャのそれに匹敵していたことを示し、バスクがイベリア半島とヨーロッパ経済の中あったことを明らかにした。それゆえにセビーリャがスペインを代表する港として唯一の中心と扱うには問題がある。アメリカ「発見」がスペイン経済を根本的に変えたというのは、1560年代にはまだない。

ウォーラーステインが説く「近代世界システム」理論によれば、「16世紀」、「長期の16世紀」にヨーロッパ世界経済が成立し、躍動する。その後の産業革命が大きな

役割を担い、産業資本・近代世界（「近代」）の形成に結び付いたことはよく理解できる。この事象が説明通りならば、その前の時代（「近世」）に当てはめるには本論文で問題にしている時代・時間を短縮しなければならない。ここにまで行き着くのにまだ「時間の経過」（タイムラグ）があったのである。そのために本論で取り上げたように16世紀「スペイン」の事実をもって確認すると、その理論に異議を言う余地がある。

「16世紀」からの流れをみると、歴史の分岐点に「新大陸」「アメリカ」への「到達」（発見）があり、それゆえにスペインが近代へ向かう先駆的な役割がクローズアップされるのである。新大陸発見の影響はスペインやヨーロッパ経済の変貌をもたらして、ウォーラーステイン理論形成に役立ったが、スペイン・ヨーロッパ商業においてその影響は進むが、かなり遅く。時間が経過した後だった。少なくとも16世紀後半、70年代終わり以降に影響・変化が散見する。実質的な商業ルートはアメリカと繋がったセビーリヤがあるアンダルシアからカンタブリア、バスクの沿岸を進む。先の理論では、アンダルシアのセビーリヤが16世紀前半からスペイン経済の中心となっているが、ヨーロッパの中心ではなかった。

貿易はまだ従来の均衡を覆すほどの重みがなく、実際の商人たちの交易活動を見ると、1560年1570年代までは大西洋岸バスク地方のビルバオがセビーリヤ同様に拠点になっていた。そのビルバオはこの期以前から北西ヨーロッパ大西洋沿岸を結ぶ商業拠点である港であった。またビルバオ —

リスボン — セビーリヤをつなぐ線は、国内の商工業の発展と結びついていた。バスク、ナバラ、カスティーリヤそれぞれの内陸の産業や市場とつながっていたのである。17世紀「衰退」によってカスティーリヤ王国全体が後退したように取られがちだが、バスクなど半島周辺地域には小規模ながら経済は堅調、保持されていた。その証があるから、19世紀スペイン産業革命の時期まで「準備」「実現」していたのは半島周辺地域であったのである。

ウォーラーステインは持論の根幹になる、いわゆる「コロンブスの交換」を重視した。「世界分業体制」が構築されるのに新大陸と旧大陸のそれぞれの物産の交流があるという論立てである。とりわけ砂糖と綿花について言及し旧大陸から新大陸に渡り、次にその産物がプランテーション農園経営によって大量にもたらされて原料となり、産業革命に結び付く<sup>（注31）</sup>。産業革命によって世界経済を形成し、世界分業体制が可能になる。しかし、行論中に述べたようにそこに至るまでの「時間」はまだ先にあり、「歴史事実」がまだあったのである。

## おわりに

1560 - 70年、ピロティが史料調査から論証したように、ビルバオの交易はセビーリヤのそれに匹敵した。一般に流布されていることに依拠すれば、新大陸「発見」の影響はすぐにもスペインやヨーロッパ経済を「変貌」させ、ピエール・ショーニュ（Pierre Chaunu）やウォーラーステイン（Immanuel Wallerstein）の理論形成に材料



を提供した。前者はセビーリャ商務院(Casa de Contratacion)に保管された大西洋貿易に関する文書から貿易の循環を明らかにした。この循環から見ても、スペイン・ヨーロッパ商業においてアメリカ「発見」の影響は進むが、その進度は本論で見てきたようになり遅く、同一世紀の四半世紀の時間を要した。

16から17世紀、世界経済は西ヨーロッパを「中軸」とした商業覇権が確立され、次代の資本主義が近代の「様式」(形式)を得ることになると、「周辺」(アフリカ、東欧)から引き出された力が経済発展をもたらし、やがてイギリスがその中心に位置するようになる。このような情勢をビルバオの港を支える「商業ダイナミズム」から見ると、従来の北西ヨーロッパの商品中心であったが、その扱う商品に変化が見えた。スペイン産から植民地産のものへ。植民地原産の主たるものはアメリカ銀であった。商品としての「地金」銀は、理論通りに流れたかもしれない。しかし、ビルバオを中心としたバスク商人が展開した加工や転売の「利」を考えると、アメリカ銀そのものの影響はイベリア半島内では限定的だった。しかし、16世紀ビルバオがコントロールする商業網はカスティーリャ経済体制を基盤としたとすると、ビルバオ商人の成功は「カスティーリャの動向」によった。この世紀最終の四半世紀、北西ヨーロッパ(オランダ、イギリス、フランス)の紛争はビルバオ商人が「アメリカ」との関係が強めることになった。17世紀初め北西ヨーロッパの紛争による変化はビルバオ市場に打撃を与えた。そのためにビルバオにとっては

「小さな」商業網に過ぎなかったポルトガル、カスティーリャ、アンダルシア、アメリカへ再投入することになった。「港」分散は経済力分散に結び付く。さらに同じバスク海岸からギブスコアの港がライバルとして登場するようになったのもこの時期であった。

ビルバオ商人は、従来の商品市場への投資ではなく、「冒険」に対して契約人や公証人を活用して海上保険や貸し付けなどの金融投資を進めていた。身内のビルバオ、サントンデール、ラレドから出る船主に貸し付けをし、ニューファンドランドへ向かうフランス・バスク人に「銀」を貸す。危機や紛争に対応する能力がこれらの「貸し付け」策には見られる(巻末表1,2,5参照)。

ビルバオの港を中心した商業網を見ると、貸し付けは個人ではなく、ビルバオ・カスティーリャ関係者で構成する、限られた、小さなネットワーク(商業網)で行われた<sup>(注32)</sup>。そのために、その富、豊かさは外からは見破れず、収益は王と共に限られた財政家(商人)にもたらされた。それゆえに、16世紀後半、「戦争」になると、商業への打撃はあったが、限られた部分であっても「(資金)力ある部分が戦争関連の活動へ転換する。バスクで建造された「軍艦」が派遣さる。王の勅令によってビスカヤとギブスコアには造船所が建立され、兵器工場が大きくなった。1580年から1620～1640年までに軍艦・兵器製造がバスク経済を支えるようになったのである。巻末図表6にあるように市場取引でも「金属加工」や「船用品」の項目が目立つのはその影響である。カンタブリアからギブスコア

までの海岸線に造船所が新設された<sup>(注33)</sup>。

「歴史事実」は理論通りではなかった。その一端を本論で明らかにした。最後にテーマとして取り上げなかったが、バスクのような「ノンネーション」の地域・地方が18世紀以降の国家（ネーション）の時代には名称すら消えてしまう。これについては、別稿を参照して欲しい<sup>(注34)</sup>。地域・地方は名称が消えてからも綿々と経済活動を続けていた。その繋がりから、19世紀スペイン産業革命の中心になるバスク地方があった。カタルーニャにおいても同様である。近代スペイン経済は中央部ではなく、周辺沿岸部が中心になった。そのためにスペイン全体の経済的停滞が印象付けられて「スペイン衰退」を踏まえた論立では進むが、規模的には小さい地方の部分では十分な発展が見られ、豊かな地方があったのも歴史的事実である。

(2017年11月 鎌倉・梶原にて)

最後に学恩を受けた「恩師」について記しておきたい。学部時代に西洋史についてご指導いただいたのは、川口博（オランダ近世史、静岡大学名誉教授）と新田一郎（西洋古代史、島根大学名誉教授）の両先生だった。大学院とスペイン留学中にご指導いただいたのは、橋口倫介（西洋中世史、上智大学元学長、名誉教授）、フアン・ロペス・ソペーニャ（スペイン現代史、上智大学元教授、神父、イエズス会士）、フェルナンド・ガルシア・デ・コルタサル（スペイン現代史、デウスト大学教授、スペイン王立アカデミー現役会員）の各先生方であった。残念ながら、ガルシア・デ・コルタサル先

生を除く方々は、いま泉下の人となられた。そして三浦一郎先生（西洋古代史、上智大学名誉教授）もその一人だが、公私にわたりお世話になったことを忘れずに記さねばならない。ミリオンセラー『世界史こぼれ話』の著者として博覧強記な先生から多くのことを教わった。多作な先生のお手伝いをする日々は計り知れない知識を教示され、ご友人たちの輪に加えていただいた。現在でも書店の書架に『西洋の故事・名言ものしり辞典』（初版は大和出版、その後PHP文庫、明治書院と改定・加筆しながら出版継続中）がある。「原文」のエビデンスを探すことから始まった、この企画は筆者にとって「歴史家」養成講座のようだった。文章作成だけでなく、原典史料を調べる歴史研究の姿勢について仕事を通じて先生から教わった。さらに仕事の「おわりに」初版の原稿料をそのままいただいた。今でも印税がある。市中で著作名に「三浦一郎」とあれば、つい手にとってしまう。忘れがたい恩師である。

その他多くの方々から学恩を受けた。5年、10年ごとに「方向」を変えることを自認していた者にとって、あしかけ30年も同じ職場に留まったのは「奇跡」に近く、多くの人々の「恩」をお受けしたことによる。多田真鋤先生（本学元教授、慶応義塾大学名誉教授）には公私にわたりご恩を受け、本学にこんなにも長期に勤務し、同じ鎌倉の地で先生の晩年、「旅立ち」に立ち会えた。最後に記してご恩をお受けした皆様共々に感謝します。

注：

注1 単著『バスク もう一つのスペイン』（彩流社 初版1984年、改訂増補版1987年）、単著『バスクとバスク人』（平凡社新書2004年）、共著『新スペイン内戦史』（三省堂1986年）、編著『スペイン讃歌』（1992年春秋社）、監修共著『新訂増補 スペイン・ポルトガルを知る事典』（2001年、平凡社）、編著『スペイン内戦とガルシア・ロルカ』（南雲堂フェニックス2007年）、共著『スペイン内戦（1936-1939）と現在』（ばる出版 2018年）、単著『物語バスクの歴史』（中公新書 近刊）

注2 ブローデル、フェルナン『地中海』全5巻（浜名優美訳、藤原書店 1991-1994年）、初版は1949年。ウォーラーステイン、I『近代世界システム I』（川北稔訳 岩波書店1981年）、初版は1974年。

注3 ブローデル、フェルナン『歴史入門』（金塚貞文訳、中公新書 2009年）の訳者解説。「ビスカヤ人、バスク人」については、『地中海 I』pp.377-378、p.422、p.502、『地中海 II』p.214

注4 ウォーラーステインの理論については、訳者解説参照。大西洋貿易の中でも「砂糖」に関連して、玉木俊明『近代ヨーロッパの形成』（創元社2012年）がポルトガル（pp.166-168）、スペイン（pp.171-173）にふれている。大西洋上にあるマデラ島の砂糖については、ビルバオ入港の品にもある。

注5 ミッシェル・モラ・デュ・ジュルダン『ヨーロッパと海』（深沢克己 訳 平凡社 1996年）には、「親切的な海上輸送人—バスク人とブルターニュ人」の項目 pp.114-116。その他、北ヨーロッパ大西洋沿岸から地中海への航行については、p.101、pp.149-150

注6 Arostegui, Isidoro Delclaux: Pequeña historia de un desarrollo singular, Ediciones Induean, Bilbao, 1984, pp.113-114

注7 バスク、ビルバオの交易につて、以下の論文も参照した。

Orella Martínez, José Luis: Breve historia de

Guipúzcoa y

Sus instituciones, Fundación Popular de Estudios

Vascos, 2012, Bilbao.

Orella Martínez, José Luis: Geografías mercantiles vascas en la era moderna las relaciones mercantiles y marítimas de los vascos con el Condado de Normandía durante los siglos XIV y XV, Lurralde, Investigación y espacio, N.31, 2008. Arizaga, Beatriz y Bochaca, Michel: El comercio marítimo de los puertos del País Vasco en el Golfo de Vizcaya a finales de la Edad Media, Itsas Memoria. Revista de Estudios Marítimos del País Vasco, 4, Donostia' San Sebastián, 2003

注8 Priotte, Jean-Philippe: El comercio de los puertos vascos peninsulares con el noroeste europeo durante el siglo XVI, Itsas Memoria. Revista de Estudios Marítimos del País Vasco, 4, Donostia' San Sebastián, 2003（以下、Priotte ①と略す）.p.200

注9 ビルバオ領事館およびビルバオが関係する海外公館については、Divar, Javier: El Consulado de Bilbao y la extensión americana de sus Ordenanzas de Comercio (500 Aniversario: 1511-2011) Editorial DYKINSON, S.L. Madrid, 2010 参照。

注10 Priotte ① p.196

注11 16世紀の価格変動については、古典的なハミルトン説はエリオット、J. H.『スペイン帝国の興亡 1469-1716』（藤田 一成訳 岩波書店 2009年）pp.212-213 参照、ウォーラーステインとショーニュについては、『近代世界システム I』（川北稔訳 名古屋大学出版会 2013年）pp.76-77にある。急激な上昇、その後の低下が共通して見られる。

注12 「16世紀」について、ウォーラーステインが解説する。ウォーラーステイン、I『近代世界システム I』（川北稔訳 名古屋大学出版会 2013年）pp.118-119 参照。

注13 Priotte, Jean-Philippe: Bilbao et ses marchands au XVI siècle. Presses

- Universitaires du Septentrion,2004 (以下、Priotte ②と略す) p.11
- 注14 Priotte ② p.193にある試算。Voltes Bouの資料では、1550年頃メキシコに白人20万人、全中南米合計で65万人強とある。Voltes Bou,Pedro:Historia de la economía española hasta 1800,Editora Nacinal,Madrid,1972,p.234
- 注15 Priotte ① p.194
- 注16 Priotte ① p.195
- 注17 Priotte ① p.196
- 注18 Priotte ① p.200
- 注19 Priotte ① p.201
- 注20 Priotte ② p.134
- 注21 Priotte ② p.135
- 注22 Priotte ③ p.105
- 注23 Priotte ③ p.105
- 注24 Priotte,Jean-Philippe:Emigración,redes vascas de negocios y poder en el imperio español (1500-1630),Historias 42,Revista de la Dirección de Estudios Históricos del Instituto Nacional de Antropología e Historia,México,D.F.,enero-abril 1999。(以下、Priotte ③と略す) p.104
- 注25 Priotte ③ p.106
- 注26 Consuladoは領事館、Contrataciónは通商院とした。藤田訳では商務館、通商院、川北訳では領事館、商務院となっている。
- 注27 Priotte ③ p.109
- 注28 バスクの特権(フエロス fueros)については、  
Andrián Celaya Ibarra:"Prólogo" en Fuero nuevo de Vizcaya,Editor,Leopoldo Zugaza, Lasarte,Guipuzcoa (Durango,Vizcaya),1976. および  
Joseba Intxausti (dir.):Euskal Herria. Historia eta gizartea.Historia y sociedad,San Sebastián,1985.P.314 参照。全般については、  
Pinedo,Emikiano Fernández de:Crecimiento economico y transformaciones sociales del País Vasco 1100-1850,Siglo XXI, Madrid,1974. pp.58-60 参照
- 注29 Priotte ③ pp.109-110
- 注30 Priotte ③ p.111 原文は、L.García Fuentes,Sevilla,Los vasco y América.1991. p.18にある。
- 注31 玉木俊明『近代ヨーロッパの形成』(創元社2012年) pp.166-168
- 注32 Priotte ② pp.304-305
- 注33 山田義裕「17～18世紀のスペインの造船所」(日本海事史学会 2015年5月30日例会) 参照。
- 注34 拙論「反近代のバスク：豊かな『ノン・ネーション』の時代」(横浜商科大学論集 第48巻 第2号 2015年)「テラノバ Terranova (ニューファンドランド) 島・漁場」における「バスク」権益の喪失については、Serna Vallejo,Margarita :Los viajes pesquero-comerciales de guipuzcoanos y vizcaínos a Terranova (1530-1808) :régimen jurídico,Marcial Pons,Madrid,2010. 参照。



## 巻末図表

Priotte, Jean-Philippe : Bilbao et ses marchands au XVI siècle.

Presses Universitaires du Septentrion, 2004 (以下、Priotte ②) から作成した。

図表 1 (Priotte ② pp.377-379) ビルバオにおける貸主の出身別「貸主分布比率」(%)

	1519-1520	1542	1561	1591	1603	1604
出 身						
ビスカヤ	95%	97%	90%	100%	78%	74%
ブルゴス	2%	2.7%	6%			8%
イタリア	3%					
トレド		0.3%				
カスティーリャ			4%			
リオハ					4%	
ガリシア					1%	
フランス					8%	10%
ネーデルランド					6%	
カンタブリア						6%
その他					3%	2%

図表 2 (Priotte ② pp.382-384) ビルバオにおける借主の出身別「借主分布比率」

	1561	1591	1603	1604	1611
出 身					
ビスカヤ	37%	47%	54%	75%	82%
アンドンシア	18%				
カナリア諸島	18%				
カンタブリア	18%			13%	5%
フランス		50%	32%	4%	6%
リオハ			7%		
ギプスコア				4%	
その他	9%	3%	7%	4%	7%

図表3 (Priotte ② pp.385-388) ビルバオにおける出身別「売り手 分布比率」

	1519-1520	1542	1561	1591	1603	1604	1611
出 身							
ビスカヤ	68%	33%	49%	65%	49%	51%	50%
アンダルシア	4%			4%			
カスティーリャ	6%		13%				
フランス	16%		20%	26%	32%	9%	9%
ブルゴス		13%					
ギプスコア		6%					
イギリス		30%					5%
トレド		7%					
ネーデルランド					14%	34%	27%
アラゴン					4%		
その他	6%	11%	18%	5%	1%	6%	9%

図表4 (Priotte ② pp.389-392) ビルバオにおける出身別「買い手 分布比率」

	1519-1520	1542	1561	1591	1603	1604	1611
出 身							
ビスカヤ	86%	94%	8%	58%	59%	55%	67%
ポルトガル	3%						
ギプスコア	3%						
アラバ	3%						
トレド			45%	3%			
カスティーリャ (トレドを除く)			44%				
スペイン (トレド・ビスカヤを除く)				31%			
スペイン (ビスカヤを除く)					38%	43%	
ネーデルランド							13%
その他	5%	6%	3%	8%	3%	2%	20%

図表5 (Priotte ② pp.393-396) ビルバオにおける市場取引の種類別比率

	1519-1520	1542	1561	1591	1603	1604	1611
商品	81%	58%	4%	71%	80%	82%	62%
貸付	10%	26%	96%	28%	18%	16%	36%
遺産相続・ 持参金・給金		2%		1%	1%	2%	
明示無し	9%	14%		10%	1%	1%	

図表6 (Priotte ② pp.397-400) ビルバオにおける販売品目の種別比率

	1519-1530	1542	1561	1591	1603	1604	1611
品 目							
織物・小間物	41%	55%	67%	45%	39%	25%	33%
香辛料・染料	26%		8%				6%
金属・加工品 鉱物	4%	10%	2%	31%			
食料品・家畜	6%		4%	9%	3%	3%	6%
船・用品・武具	2%	2%				7%	
不動産	4%						
蠟		17%	12%	5%	2%	3%	9%
皮革		2%	2%	6%	2%		
小間物		14%			5%		
鉄・鋼鉄・ 金属加工品・鉱物						11%	13%
他の金属					42%	43%	
ブドウ酒・リンゴ酒					1%	1%	4%
不明	12%						
その他	5%				6%	7%	29%

図表7 (Priotte ② pp.401-404) ビルバオで売却された商品荷出し元の分布比率

	1519-1530	1542	1561	1591	1603	1604	1611
国 別							
イギリス	19%	26%					
フランス	30%	11%	32%	27%	27%	8%	10%
ビスカヤ	5%						
ネーデルランド	24%	8%	3%				7%
アイルランド	3%						
アメリカ				7%			
ドイツ・バルト海						15%	
その他	1%	3%	4%	5%	4%	6%	7%
不明	18%	52%	61%	61%	69%	71%	76%

